

平成27（2015）年度
東京大学大学院学際情報学府学際情報学専攻
修士課程（文化・人間情報学コース）
入学試験問題
専 門 科 目

（平成26年8月18日 14：00～16：00）

試験開始の合図があるまで問題冊子を開いてはいけません。開始の合図があるまで、下記の注意事項をよく読んでください。

1. 本冊子は、文化・人間情報学コースの受験者のためのものである。
2. 本冊子の本文は6ページである。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合には申し出ること。
3. 解答用紙は3枚ある。第1問は、解答用紙1枚を使うこと。（裏面を使ってもよい）第2問は、選択した用語ごとに解答用紙1枚を使うこと。このほかにメモ用紙が1枚ある。
4. 解答用紙の上方の欄に、問題の番号（例：「第1問」）、選択記号がある場合にはその記号（例：「第2問（a）」）及び受験番号を必ず記入すること。問題番号、選択記号、及び受験番号を記入していない解答は無効とする。
5. 解答には必ず黒色鉛筆（または黒色シャープペンシル）を使用すること。
6. 第1問は日本語で答えること。第2問は日本語か英語で答えること。
7. 試験開始後は、中途退場を認めない。
8. 本冊子、解答用紙、メモ用紙は持ち帰ってはならない。
9. 次の欄に受験番号と氏名を記入せよ。

受験番号	
氏 名	

文化・人間情報学 第1問 Question L1

次の(A)(B) 2つの文章を読んで、問1から問3の質問に日本語で答えなさい。問題文(A)は、1929年が初出、問題文(B)は、1960年が初出である。この第1問全体(問1から問3まで)で解答用紙1枚を使いなさい。ただし裏面も使ってよい。

(A)

芸術の性格は、この世を離れた美の国を、この世を離れた真の世界を、吾々に見せて呉れる事にはなく、そこには常に人間情熱が、最も明瞭な記号として存するという点にある。芸術の有する永遠の観念というのが如きは美学者等の発明にかかる妖怪に過ぎず、作品が神来*を現そうと、非情を現そうと、気魄を現そうと、人間臭を離るべくもない。芸術は常に最も人間的な遊戯であり、人間臭の最も逆説的な表現である。例えば天平の彫刻は、人の言うが如く非個性的だが、非個性的という事は非人間的という事にはならない。天平人等は、己れの作品をこの世から決定的に独立したものとしようとして企図したのではない、唯、個性というのが如き観念的な近代人の有する怪物を、彼等は知らなかったに過ぎない。吾々が彼等の造型に動かされる所以は、彼等の造型を彼等の心として感ずるからである。

(中略)

然し芸術家にとって芸術とは感動の対象でもなければ思索の対象でもない、実践である。作品とは、彼にとって、己れのたてた里程標に過ぎない、彼に重要なのは歩く事である。この里程標を見る人々が、その効果によって何を感じ何処へ行くかは、作者の与り知らぬ処である。詩人が詩の最後の行を書き了った時、戦の記念碑が一つ出来るのみである。記念碑は竟に記念碑に過ぎない、かかる死物が永遠に生きるとするなら、それは生きた人が世々を通じてそれに交渉するからに過ぎない。

人の世に水が存在した瞬間に、人は恐らく水というものを了解したのであろう。然し水をH₂Oをもって表現した事は新しい事である。芸術家は常に新しい形を創造しなければならない。だが、彼に重要なのは新しい形ではなく、新しい形を創る過程であるが、この過程は各人の秘密の闇黒である。然し、私は少くとも、この闇黒を命とする者にとって、世を貨幣の如く、商品の如く横行する、例えば、「写実主義*」とか「象徴主義*」とかいう言葉が凡そ一般と逕庭*ある意味を持つという事は示し得るだろう。

神が人間に自然を与えるに際し、これを命名しつつ人間に明かしたという事は、恐らく神の叡智であつたらう。又、人間が火を発明した様に人類という言葉が発明した事も尊敬すべき事であらう。然し人々は、その各自の内面論理を捨てて、言葉本来のすばらしい社会的実践性の海に投身して了った。人々はこの報酬とし

て生き生きした社会関係を獲得したが、又、罰として、言葉は様々なる意匠として、彼等の法則をもって、彼等の魔術をもって人々を支配するに至ったのである。そこで言葉の魔術を行わんとする詩人は、先ず言葉の魔術の構造を自覚する事から始めるのである。

(出典：小林秀雄「様々なる意匠」『Xへの手紙・私小説論』新潮文庫、1962年所収、初出は『改造』1929年4月号)

(注解)

- * 神来 インスピレーション。靈感や閃き。
- * 写実主義 通常いわれる「写実主義」は、現実を主観や感情を抑えてあるがままに描写しようとする文学上・芸術上の技法、また立場。19世紀半ばに興った。
- * 象徴主義 通常いわれる「象徴主義」は、自然主義の客観的な描写に対し、思考や情緒を何らかの象徴によって表現しようとする芸術上の立場。19世紀の末、フランスに興った。
- * 逕庭 かけはなれていること。大きく相違していること。

(B)

芸術とは、たのしい記号と言ってよいだろう。それに接することがそのままの楽しい経験となるような記号が芸術なのである。もう少しむずかしく言いかえるならば、芸術とは、美的経験を直接的につくり出す記号であると言えよう。ここでさらに、美的経験とは何か、が問題になる。結論から先に言えば、美的経験とは、もっとも広くとれば、直接価値的経験(それじしんにおいて価値のある経験)とおなじひろがりをもつものと考えられる。一つの例をあげて言うと、直接価値的経験とは、労働をとおして食費をかせぐという間接価値的経験の結果えられた「食事をする」という経験である。そうして、あらゆる間接価値的経験が、何らかの直接価値的経験にむかってつがえられているとすれば、同じ意味で、美的価値は、あらゆる間接的価値経験の底に前提としてかくされている。

それにしても、飯を食うという行為は、美的経験だろうか。今までの論法でゆくと、生きるという経験全体が、美的経験によっておおわれてしまうことにならないか。潜在的にはそうだ、と考えてよいと思う。だが、すでにデューイの指摘しているように、毎日の経験の大部分は美的経験としてたかまってゆかない。このために、美的経験としてとくに高まって行く経験だけを、狭い意味での美的経験と呼ぶことにする。どんな価値的経験もそれが価値的な経験として深く印象づけられ、それじしんとしての一種のまとまりをもっているようなものであれば、美的経験と言える。一本のベルトのように連続しているように見える毎日の経験の流れにたいして、句読点をうつようなしかたで働きかけ、単語の流れの中に独立した一個の文章を構成させるものが、美的経験である。

(中略)

経験全体の中にとけこむような仕方で美的経験があり、また美的経験の広大な領域の中のほんのわずかな部分として芸術がある。さらにその芸術という領域の中のほんの一部としていわゆる「芸術」作品がある。いいかえれば、美が経験一般の中に深く根をもっていることと対応して、芸術もまた、生活そのもののなかに深く根をもっている。

(中略)

芸術を、純粹芸術と大衆芸術とにするどくひきさく力は、二千年前のギリシアにおける専門的芸術家の誕生以来はたらいっていたものではあるが、二十世紀に入ってマス・コミュニケーションの手段の発達、民主主義的政治・経済制度の世界的規模における成立とともに、純粹芸術と大衆芸術との分裂は決定的なものとなった。これらにくらべると、限界芸術は、五千年前のアルタミラの壁画以来、あまり進歩もなく今日まで続いてきている。これは、二十世紀の文明に残存している原始的なものと理解してよい。二十世紀に入ってマス・コミュニケーション時

代の成立とともに新しく急激に進んできた純粋芸術・大衆芸術の分裂は、それじしんとしては五千年前とあまり変わりばえのしない状態に停滞している限界芸術を、新しい状況の脈絡の中におくことによってこれに新しい役割をおわしているように思える。

（出典：鶴見俊輔「芸術の発展」『限界芸術論』ちくま学芸文庫、1999年所収、初出は『講座・現代芸術』第1巻、勁草書房、1960年）

問1 問題文(B)の下線部で、「二十世紀に入ってマス・コミュニケーションの手段の発達、民主主義的政治・経済制度の世界的規模における成立とともに、純粋芸術と大衆芸術との分裂は決定的なものとなった」と述べているのはなぜか。理由を簡潔に100字程度で述べなさい。

問2 2つの問題文は、いずれも芸術が「記号」として考える点で一致しているが、その「記号」の理解には違いがある。問題文(A)と(B)が「記号」としての芸術について、どのように異なる理解を示しているのかを300字程度で説明しなさい。

問3 あなたが学際情報学府で探究しようと考えている研究対象を、2つの問題文が論じる「記号」ないし「言葉」という観点から、解答用紙1枚の範囲内(裏面を使ってもよい)で論述しなさい。

文化・人間情報学 第2問 Question L2

以下の(a)から(f)の6問のうち、2問を選び、それぞれ20行以内で説明しなさい。英語で答えてもよい。ひとつの問題についてそれぞれ1枚の解答用紙を使い、解答文のはじめに、必ず選んだ記号を示すこと。

(a) 「正義の倫理」と「ケアの倫理」を説明し、両者をめぐる論争について述べなさい。

(b) 「ブレンド型学習」と「完全習得学習」の関係について述べなさい。

(c) 「表意文字」と「表音文字」について述べなさい。

(d) 「物語の歴史化」と「歴史の物語化」について述べなさい。

(e) 「メディア・リテラシー (media literacy)」と「情報倫理 (information ethic)」を対比的に説明しなさい。

(f) フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure) の「記号学 (la sémiologie)」とチャールズ・サンダース・パース (Charles Sanders Peirce) の「記号論 (the semiotics)」とを比較して説明しなさい。